HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	大学博物館の活動 ： 北海道大学総合博物館の現場から
Author(s)	持田, 誠
Description	国民のための大学づくり. 2
Citation	北海道の教育 ： 教育実践の集約と理論化, 2009, 249-252
Issue Date	2009-07-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/39314
Type	conference paper
File Information	HokkaidoEdu_2009.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

2　大学博物館の活動
―北海道大学総合博物館の現場から―

持田　誠（北海道大学総合博物館
研究支援推進員）

今日、「国民のための大学づくり」を考える上で、大学が自ら有する学術資源を基に、直接・間接的に国民へ知の還元を果たす機関として、大学博物館の持つ役割は重要であると考えられる。しかし、昨年七月に財務省が発表した「平成二〇年度予算執行調査」によれば、国立大学法人における博物館事業について、(1)廃止等も踏まえての博物館等施設の見直し(2)コスト削

減と共に入館料徴収や図録販売等の増収(3)運営や業務評価などが「今後の改善点・検討の方向性」として打ち出されている。これに対し、大学博物館等協議会は、これらの内容は大学博物館等の使命に関する無理解によるものであるとして、一〇月二四日付で声明を出した。

大学博物館の現状の一端について、北海道大学総合博物館の活動を現場の視点から報告する。

(1) 北海道大学総合博物館の組織

現在、北海道大学総合博物館の専任職員は、教員が九名、事務職員二名である。なお、事務職員は理学・生命科学事務部に所属し、博物館担当として係長一名、係員一名が配置されている。また、教員一名は函館市に存する分館、水産科学館在籍である。教員はいずれも学術専門分野を異にし、博物館教育・メディア研究系以外は、保有する学術資料に基づく専門分野となっている。

この他、事務室に派遣職員一名、情報メディア室に事務補助員一名、研究部に研究支援推進員二名、水産科学館に用務補助員一名、また、受付・展示解説要員として、請負会社の職員四名（常時二名）の、いわゆる非正規雇用職員が配置されている（平成二〇年度現在）。

現実的には、資料・標本類の維持・管理や展示作成、教育・普及活動などの博物館活動を実施するにあたって、専任教員のみでこれらを遂行することは不可能である。そのため、実務には非正規職員や博物館ボランティアが任に当たっているのが現状である。

(2) 調査・研究活動

博物館の専任教員は、一般の大学教員同様、各専門分野に関する学術研究を行う。この他、これらの教員に指導を受ける大学院生や学部生が博物館資料を利活用した研究活動を行う。また、当館には資料部研究員の制度があり、当館の施設・資料を利活用した研究が行われている。資料部研究員には学内の専任教員が兼務している場合と、当館に在籍して無給であるが研究活動に従事している場合がある。

調査・研究活動は大学・大学博物館双方にとって、活動の基幹となるものである。しかしながら、大学博物館教員は、それぞれが専門とする学術資料の日常的な維持管理や各種博物館行事の企画・立案に至る博物館運営に関するさまざまな業務を同時並行的に担わなければならない。また、当然ながら学生教育も重要な

活動の柱となる。

そのため、いずれの教員も研究に関する時間的・物理的な余裕が大幅に削減されている状況は否めない。博物館全体では九名の教員配置であるが、分野別には各一名の配置であり、各分野の技術的・事務的な人的支援体制が十分でないためである。

教員の調査・研究の停滞は、所蔵する博物館資料の有効活用という点で大きな弊害である。所蔵する資料に光りを当て、内包する学術的価値を社会に発信することによって、博物館資料の存在意義は無限に高まっていくものだからである。博物館資料は調査・研究に基づく学術活動によって、国民にその成果が還元されるものであり、本活動の活性化は大学博物館の存在意義の根幹に関わるものである。

(3) 収集・保存活動

当館で所蔵する学術資料は、専任教員の研究活動や学生教育に供される他、国内外からの研究利用依頼に応じて様々な形で利活用されている。研究機関からの要望に応じた標本貸し出しや、相互の資料交換などにも応じている。

北海道大学総合博物館には、札幌農学校以来の北大各部局によって収集されてきた学術資料が集積されている。このほか、当館の活動に理解を示し、卒業生や市民から資料の寄贈を受ける場合もある。

今日も北大は日々、改組や校舎新築によって、目まぐるしく変化している。これにともない、さまざまな研究資料の更新が行われ、貴重な学術遺産が検証されないままに廃棄されてしまうケースが後を絶たない。総合博物館では、これらの収集に積極的に取り組んでいるが、問題はその収蔵スペースと整理要員の不足である。

当館は現在、旧理学部本館南側のスペースを確保しているに過ぎず、北側についてはごく一部を収蔵庫として利用しているが、未だに全館整備に至っていないのが現状である。このことは、増大する学術資料の収集・保存スペースの絶対的不足を招き、資料保存上きわめて劣悪な状態での保管を余儀なくされている。現状では、避難通路の確保など、防災面での信頼性をも揺るがしかねない状況に発展してきている。

また、収蔵した資料は、整理し、資料情報を記載したラベルと、照合可能な台帳を整備し、さらに資料情報を社会へ発信する体制を整えなければ、有効に活用することができない。しかし現状では、資料整理に関

する予算や人的配置が未だに不充分である。このため、少数の短時間勤務職員（パート職員）が教育普及活動など他の博物館活動と共に資料整理業務を細々と担う他、市民ボランティアなどの力を借りて実施しているのが現状である。

学術資料の整理業務は元来、専門的知識と技術を要するものであり、常に専門知識の習得、技術の研鑽、そして技術の継承が意識されなくてはならない。こうした面からみて、現状の非正規職員とボランティアに依存した資料保存、特に資料保存に関する専任の技術職員の配置が無いことは、適切な資料管理を行う上できわめて問題である。

(4) 入館者数にとらわれない評価を

以上、北海道大学総合博物館の日常活動をざっと紹介してきた。博物館活動は多様で複雑なものであるが、いずれの活動もその柱は、大学の持つ多彩な学術資源を有効に活用し、大学を真に開かれた国民のものとするためのものである。そこには、目に見える形での直接的な効果だけでなく、有形無形の資料を将来にわたって維持・管理し、いつでも有効な活用ができる体制を整えておくという、一見わかりづらい間接的な、しかし根源的な目的が含まれている。そのため、単に博物館を一過性のイベントを行う「展示会場」として見るような入館者数による評価は、大学博物館の存在意義を覆い隠してしまう危険性をはらんでいる。

大学博物館の評価にとって、入館者数はあくまでも一つの指標に過ぎず、例えば資料の整理状況、貸し出し・利用の動向、資料照会や情報発信の動向、講座参加者の感想や評価など、さまざまな視点を総合的に分析することが必要と考えられる。